

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00447

研究課題名(和文) ロシア都市文学の聖地コロムナとペテルブルク神話の生成・変容

研究課題名(英文) Kolomna, the Sacred Ground of Russian Urban Literature and the Creation and Transformation of the Petersburg Myth

研究代表者

近藤 昌夫 (KONDO, Masao)

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：80195908

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、1)従来通説として受容されてきた「ペテルブルクの神話」の文学的
原点を、下町コロムナを舞台にしたプーシキンの「ペテルブルク物語三部作」の分析によって論証したこと、2)
「ペテルブルクの神話」がその後、ロシア近代の「分断」を描いたゴーゴリの「ペテルブルク小説」と、ゴーゴ
リを批判して「調和の願望」を描いたドストエフスキーの「夢想家の物語」によってコロムナを舞台にした物語
から修辭化していったこと、3)ドストエフスキーの「夢想家」に新たな解釈を提示したこと、4)「虐げられた
人々の系譜」とされる「小さき人」の文学史的解釈に調和の願望の欠落を指摘したことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義は、従来物語の非現実的内容から先験的に受容されていた「ペテルブルクの神話」の根拠をテキスト
分析によって明証し、「神話」の修辭化の端緒とともに「小さき人」の解釈に新たな解釈を示すことでロシア・
モダン・クラシックの前史に新たな光を当てたことにある。主な社会的意義は研究成果を学術書(『ペテルブル
ク神話と文学のコロムナ』水声社、2023年)として出版したことにある。

研究成果の概要(英文)：The results of this research may be listed as follows: (1) having
demonstrated the literary origins of the "St. Petersburg Myth" by analyzing Pushkin's "Trilogy in
Kolomna (St. Petersburg Stories); (2) indicated the rhetorical beginning of the "St. Petersburg
Myth"; (3) represented a new point of view on Dostoevsky's dreamer (mechitatel'); (4) pointed out the
lack of a desire for harmony in the traditional interpretation of "The Little Man."

研究分野：19世紀ロシア文学

キーワード：ペテルブルク神話 コロムナ プーシキン ゴーゴリ ドストエフスキー

1. 研究開始当初の背景

申請者は、全体構想(「文学都市ペテルブルクを触媒にしたモダンクラシックの生成発展過程の解明」)の指標として単著書『ペテルブルク・ロシア 文学都市の神話学』(未知谷、2014年)を公表後、同書の内容検証を目的としてサンクト・ペテルブルク市で在外研究を行なった(2014年度関西大学学術研究)。その結果、1830年代から1840年代の文学作品に頻出するコロムナ地区(同市南西部の旧市街)の文学的重要性の解明が新たな研究課題となり、帰国後、単著書『散策探訪コロムナ ペテルブルク文学の源流』(未知谷、2015年)に問題の所在(土地柄と文学作品の相関関係)を提示した。その後ドストエフスキーの、コロムナの「夢想家」の物語の分析を経て(科研費「コロムナ地区と1840年代のドストエフスキー」課題番号17K02631)、プーシキンに始まり、ゴーゴリ、ドストエフスキーが継承した、一連のコロムナの物語は「銀の時代」以降も続く文学的系譜「ペテルブルク神話」の原点ではないかとの問いが新たに生まれ、本研究課題に至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、上記「1.研究開始当初の背景」で述べた全体構想を進めるために、いわゆる「ペテルブルク神話」の文学的根拠を、コロムナ地区を舞台にした1830～40年代の文学テキスト(プーシキンの「ペテルブルク物語」三部作、ゴーゴリの「ペテルブルク小説」、ドストエフスキーの「夢想家」の物語)の分析によって論証し、特に全体構想前半部分に占める、コロムナ地区の文学的意義を解明することにある。

3. 研究の方法

全体を通して「ペテルブルク神話」をコンテキストにしたテキスト分析を研究の基本的方法としたが、土地柄との関係を解明するために適宜フォークロアを参照した。分析対象にした作品は下記の通りである。

令和3年度は、プーシキンのペテルブルク神話『青銅の騎士』の主人公がコロムナの小役人であることに改めて注目し、「ペテルブルク物語」(『コロムナの小さな家』『青銅の騎士』『スペードの女王』)三作品の求心力がコロムナにあり、相互に「神話」で結びついた三部作であることを論証した。主な分析方法として、『コロムナの小さな家』ではクリスマス聖週間(スヴァートキ)の「反転」の原理を、『青銅の騎士』ではB・マリノフスキの神話の定義(『呪術・科学・神話』人文書院)を、『スペードの女王』ではユゴー『ノートル=ダム・ド・パリ』との比較を用いた。

令和4年度は、プーシキンの『コロムナの小さな家』に「ペテルブルクの自然とコロムナの全て」を見出したゴーゴリと「ペテルブルク神話」の関連を分析した。前半は、ゴーゴリのアラベスキ版『肖像画』と改作『肖像画』の比較を分析方法に用いてゴーゴリが、プーシキンによる神話『青銅の騎士』が言明するペテルブルクの秩序「分断と調和の願望」のもっぱら「分断」を描いたことを明らかにした。この結果に基づき、後半ではゴーゴリが「ペテルブルク小説」の掉尾を飾る『外套』で、精神に「分断」をきたす『狂人日記』のポプリーシチンと身体に「分断」が現れる『鼻』のコワリョフから、身体と精神の両方に「分断」を発症する主人公アカーキを造形したとの結論を導いた。『鼻』の分析に際しては教会の祝祭日「生神女福音祭」と民間の「大地開きの日」を解釈の方法として参照した。

令和5年度は、ゴーゴリの分析結果と課題番号17K02631の成果を踏まえ、40年代のドストエフスキーがコロムナの産物だという「夢想家」(『ペテルブルク年代記』)の物語を描いたのは、コロムナの文学的重要性の証であるとともに、ゴーゴリを批判することで「ペテルブルク神話」の修辭化を試みたのではないかとの問いを立て、ゴーゴリとドストエフスキーのコロムナの物語を比較した。ここではドストエフスキーのフェリエトン『ペテルブルク年代記』をメタ・テキストにして『貧しき人々』を読み直した。その結果、主人公ジェーヴシキンは『外套』のアカーキ同様コロムナの「小者」として造形されてはいるが、「風変わりな『叛逆』」(M・バフチン)¹に裡に秘めた中性的存在つまり「病身の娘」に擬されるその複雑な性格から、ペテルブルクの「夢想家」の原型であることが導き出されたので、コマローヴィチの「夢想家」²の基準を批判的に援用しつつドストエフスキーのコロムナの「夢想家」の物語を再解釈した。

最終年度はさらに、研究方法の一貫性を検証する意味で、プーシキンのコロムナの「叛徒」、ゴーゴリのコロムナの「小者」、ドストエフスキーのコロムナの「夢想家」の関連を「ペテルブルク神話」に照らして総括した。

参考文献

1. M・バフチン『ドストエフスキーの詩学』望月哲男・鈴木淳一訳(筑摩書房、1995年)

4. 研究成果

本研究の成果は以下の4点である。(1)従来通説とされてきた「ペテルブルクの神話」が、コロムナ地区を舞台にした、プーシキンの「ペテルブルク物語三部作」に始まることをテキスト分析に基づいて明らかにしたこと、(2)「ペテルブルクの神話」の修辞化の端緒が、ロシア近代の「分断」を描いたゴーゴリの「ペテルブルク小説」を批判して「調和の願望」を描いたドストエフスキーの「夢想家の物語」に始まること、(3)ドストエフスキーの「夢想家」の系譜に新たな見解を示したこと（「夢想家」は、従来「夢想家」とみなされていなかった『貧しき人々』のジェーヴシキンを原型とし、強者に力で敗退する「叛徒」風の「夢想家」『女あるじ』のオールドウイノフや『弱い心』のアルカージイ等を経て、キリスト教的兄弟愛に基づき「調和」を願望する『白夜』の「僕」に至ったのである）、(4)「虐げられた人々の系譜」とされる「小さき人」の文学史的解説に「調和の願望」が欠落していること。

また、以上の研究成果を総括した単著『ペテルブルク神話と文学のコロムナ』（水声社、2023）を刊行し、新たに全体構想後半に繋がる課題（「アレクサンドル3世時代の鉄道・電信電話文学とペテルブルク神話の変容」課題番号 24K03784）を導いたことも成果の一部に加えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 近藤昌夫	4. 巻 第16巻
2. 論文標題 『エヴゲーニィ・オネーギン』試論	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Through the Lens of Faith: Eastern and Western Perspectives. (関西大学東西学術研究所研究叢書)	6. 最初と最後の頁 39-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 近藤昌夫
2. 発表標題 文学的神話としてのペテルブルク
3. 学会等名 関西大学東西学術研究所
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 近藤昌夫
2. 発表標題 ゴゴリ『ローマ（断章）』とペテルブルク
3. 学会等名 関西大学東西学術研究所
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 近藤昌夫
2. 発表標題 『スベードの女王』のゴシック
3. 学会等名 関西大学東西学術研究所
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 近藤昌夫	4. 発行年 2023年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 312
3. 書名 ペテルブルク神話と文学のコロムナ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------